

# 室蘭支部創立50周年式典 1/2



## —市民公開講座 相続・遺言・成年後見について考える— 寸劇『親の心、子知らず』・パネルディスカッション

平成22年6月10日、室蘭支部創立50周年式典が室蘭市蓬峯殿で執り行われました。

式典に先立ち、午後2時より市民公開講座として、第1部：寸劇、第2部：パネルディスカッションが行われました。6月9日付け室蘭民報朝刊(発行60,300部)第1面下段に、市民公開講座の案内が広告され、西胆振地域から参加された市民で300席用意された会場の半数近くが埋まりました。当日室蘭民報の取材が入り6月11日付け朝刊・夕刊(発行52,630部)に掲載されました。参加された方はもとより地元西胆振の方に広く市民公開講座の様子が伝わりました。

第1部：函館支部の身近な問題を題材にした寸劇の

名演技に、講座参加者からは、うなずきや笑いが起こり、拍手喝さいの中終了しました。

第2部：パネルディスカッションでは、パネリストの室蘭公証役場公証人齊藤信一様・北海道成年後見支援センター専務理事小川孝雄様・室蘭市地域包括支援センター看護課長吉田とも子様・施設セ・ジュネス・さんじゅ代表築田浩一様・実行委員長荒川隆志会員(兼司法書士)から各専門分野の経験豊富な講演がされました。第1部で寸劇を観賞した市民からは早速、寸劇の内容、成年後見の家族報酬、遺言の書き方等の質問があり、各パネリストから丁寧な回答がありました。



寸劇



パネルディスカッション



スライド上映

引き続き5時より50周年式典が行われ、胆振総合振興局長石橋秀規様、室蘭市長新宮正志様、北海道行政書士会加藤隆夫会長より祝辞をいただきました。式典では、業務歴45年以上荒川隆志会員、同40年以上江良二三夫会員、同35年以上畠山修会員、支部役員経歴10年以上小笠原榮一会員、河野秋昭会員、竹浪継二会員への記念表彰が行われ感謝状が贈られました。

また、支部の歩みがスライド上映され、会員数、登録証明書、室蘭支部の50年間の変遷を見ることができました。

6時より祝賀会にうつり、登別市副市長高田正紀様

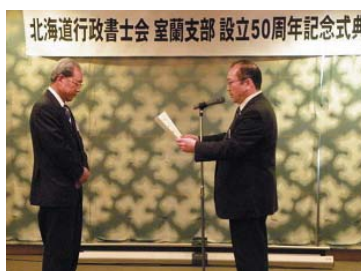
による乾杯のあと、安井裕之会員(サイドギター)率いる“ザ・ヴィガーズ”(結成16年・8名の職業は多種)のバンド演奏で会場は熱気に包まれました。

閉会の乾杯で豊浦副町長が「豊浦町には行政書士が一人もいない。役場に行政書士コーナーを作ってもよい。役場から町民相談を行政書士の皆さんへお願いしたい。」と祝賀会を締めくくられ、会場から大きな拍手が起こりました。行政書士のいない北海道の町村とのかかわりのひとつの答えとして、うれしくそして重い責任と受け止めました。

なお、支部の歩みの詳細は室蘭支部発行50周年記念誌に掲載されています。



高橋國男室蘭支部長



業務歴45年以上の表彰・荒川隆志会員



祝賀会・乾杯の様子

## 室蘭支部創立50周年記念誌 編集の苦楽 2/2

北海道行政書士会室蘭支部創立50周年を迎えるにあたり、50周年記念事業の気運が盛り上がり、平成21年度の室蘭支部総会に於いて「支部50周年記念実行委員会」が発足した。

室蘭支部が昭和35年創基以来、幾多の先輩諸氏が血涙と共に築き上げた支部の歴史が、時間という大きな流れの中に、埋没して消え去るのを傍観するのに忍びないという会員からの声で、この記念事業の一環として「記念誌」の発刊が企画された。

私共3人が記念誌編集担当に割当てられた。編集などという仕事とは無縁であった素人人間ばかりだ。

昔々、先輩から「人間は一生のうち一度は人生の約束として恥をかくようなことをやっておかなければならぬ」と聞かされたことが閃き「恥を覚悟」で引き受けた。

発刊までの道程を搜索するのに、回り道、迷い道の連続であった。「先達の労苦がこれから続く行政書士への励みとなり、一つの光明となる」と各自を励ましなが、編集作業を行った。

支部が創基から50年を迎えた今、昔事の語り部の多くが逝去され、貴重な資料が散逸していく中で、発行が平成22年6月10日という期限で如何にまとめ上げるか。心ならずも意に満たない点がスタートから残されていた。

かくして「北海道行政書士会室蘭支部創立50周年記念誌」は平成22年6月10日の記念式典の前日に印刷所から受け取った。「記念誌」が出来たのだ。わずかに200部であるが、その一冊一冊を開き、落丁、刷りの悪いのがないか一枚一枚スポットした。

記念誌を印刷所から受け取り、編集担当の共通して感じたことを一言で表すならば、「我が第一子が生まれて最初にお面にかかった時の"あの感動"」だ。子を持つ諸先生にはイメージいただけるのではないだろうか。

記念誌は、国立国会図書館法に基づき納本した。法律的には発行の日から30日以内の納本であるが6月18日に納本した。6月23日付で国立国会図書館名で「お礼状」が届き、「日本全国書誌」に書誌情報として掲載下さることになった。今後NDL-OPAC、アジア言語OPACでも広く国の内外に我が室蘭支部の記念誌情報が速報される。

これで100年後も「記念誌」を国立国会図書館で読むことが出来るのだ。

編集担当会議は13回もった。その外、E-mail連絡、電話連絡は30回余あった。

多くの支部会員は協力的で原稿が集まったが、一部の人は何回も催促し、やっと原稿を手に入れた。

原稿を指定期日まで集める策が大切だ。校正はゲラ刷りで3回行ったが、その度に誤りを発見した。素人とプロの違いを思い知らされた一駒だ。

時代はどんどん進んでいて、建物や街も日夜新しく変わっていくけれど、室蘭支部の歴史は過去に上書きされたのではなくて新しい部分を追加しているのであって、基盤となっている昔は決して無くなることはないのだ。「記念誌」はそんな過去をつなぎ止め、現在の行政書士の人達に時代を語り、そして現在の行政書士は未来へ「室蘭支部」を伝える大事な役割があるのだ。

室蘭支部では2回目20年振りの記念誌だが、多くの会員が退会・逝去されているのを見るに、今後、正確充実した記念誌を作成するために「会史役」という役職を設けて、毎年支部の歴史をまとめ引継ぐ形にしていきたいと提案したい。

私共は記念誌編集委員として「恥」をさらしたが、それ以上に得たことが多々あり、携われたことを嬉しく思う。

記念誌編集担当 江良二三夫  
甲田 啓一  
三浦 清

